

9) 転移性脳腫瘍の治療

—治療成績におよぼす諸因子の検討—

松本 正博・中沢 省三 (日本医科大学)
吉田 大蔵 (脳神経外科)

〈目的〉 転移性脳腫瘍の治療効果に及ぼす諸因子を

① 原発巣症状出現から脳転移までの期間別, ② 転移部位別, ③ 病理組織別 (肺癌), ④ 単発あるいは多発転移別, ⑤ 年齢別, ⑥ 治療法別などについて脳転移症状出現からの各々の平均生存期間を中心に検討した。

〈対象〉 男性45例・女性30例の75例で手術施行群52例・非手術群23例を対象とした。

〈結果〉 ① 原発巣症状出現から脳転移までの期間別の平均生存期間では, 脳転移症状先行群・原発巣症状出現から脳転移までの期間が半年・1年・2年・3年以下・3年より長期群に分け検討したが明らかな相関関係は認められなかった。② 脳転移部位をテント上のみ・転移巣を有する群・テント上下・テント下のみの3群に分け, 平均生存期間をみると, 各々7.2ヶ月, 5.0ヶ月, 3.5ヶ月であった。③ 病理組織別 (肺癌) の平均生存期間は, Adenocarcinoma (5.5ヶ月)・Squamous cell (7.2ヶ月)・Undifferentiated (6.2ヶ月) で明らかな差を認めなかった。④ 単発性と多発性転移別では, 手術群では両者の間に差を認めなかった。⑤ 年齢群別では, 各年代群で手術群は非手術群に比べ良好であった。しかし60才代までの群と70才以上の高齢者群との間には明らかな差を認めなかった。⑥ 手術施行群における術後補助療法別の術後平均生存期間では, Adriamycin 腫瘍床内局所注入療法 (局注療法) を28例に施行したが, 腫瘍摘出のみ (1.8ヶ月)・化学療法のみ (4.5ヶ月)・化学療法+放射線療法 (6.1ヶ月)・局注療法+化学療法 (5.9ヶ月)・局注+化学療法+放射線療法 (13.3ヶ月) であった。また局注非施行群 (4.3ヶ月)・施行群 (10.0ヶ月) と局注療法群で有意な治療効果を認めた。

〈結論〉 転移部位がテント上のみに限局している群・手術施行群・局注療法施行群で平均生存期間の優位性が示唆された。

10) 当科における転移性脳腫瘍の治療

恩田 清・田中 隆一
武田 憲夫・鷺山 和雄 (新潟大学)
本道 洋昭 (脳神経外科)

CT 導入以後の1976年9月から1987年9月までに入院治療した脳内転移例は136例で, 原発巣別内訳では肺癌83例 (61.0%), 消化器癌17例 (12.5%), 泌尿生殖

器癌13例 (9.6%), 乳癌9例 (6.6%), その他14例, 年令別内訳では30~49才27例 (19.9%), 50代45例 (33.1%), 60代42例 (30.9%), 70才以上22例 (16.2%) である。初回治療時の CT 上の転移巣数は単発78例 (57.4%), 多発58例 (42.6%) で, 治療別内訳は照射単独87例 (64.0%), 摘出+照射34例 (25.0%), 摘出6例 (4.4%), その他9例である。1989年2月までの追跡調査では, 全136例の50%生存6ヶ月, 25%生存14ヶ月で, 原発巣別の50%生存は肺癌6ヶ月, 消化器癌4ヶ月, 乳癌13ヶ月, 年令別の50%生存は30~49才12ヶ月, 50代7ヶ月, 60代6ヶ月, 70才以上4ヶ月, 初回治療別の50%生存は照射単独6ヶ月, 摘出+照射12ヶ月であった。経過を十分追跡しえた症例の死因を分析すると, 脳転移で死亡したのは全体の26.1%, 全身転移など脳転移以外によるものが61.3%, 脳転移および全身転移の両方が関与したのは12.6%である。

放射線治療について検討すると, 照射施行例で完遂しえたのは106/121 (87.6%) で, 不完全照射に終わった原因は, 神経学的所見の悪化3例, 全身状態の悪化12例である。放射線治療の効果を CT で評価すると, 評価可能例+照射終了後1ヶ月以上 CT で追跡できた症例の CR+PR は45/64 (70.3%) であった。照射単独群の治療前後の Performance status をみると, 70才未満では満足すべき改善率が得られたが, 70才以上の改善率は著しく不良であった。また6ヶ月以上生存した症例の局所再発は摘出 (3/4), 照射単独 (21/41), 摘出+照射 (5/21) の順で, 再発した症例の半数以上は再治療を要した。

我々は, 数ヶ月以上生存する見込みがあり現在の苦痛が脳転移による神経症状である患者に対しては, 積極的に治療する方針で臨んでいる。新しい治療法の工夫など, 今後さらに検討したいと考えている。

ビデオセッション

1) Syringosubarachnoid Shunt for Syringomyelic Cord Syndrome

寺林 征・伊藤 靖
新保 義勝・大倉 良夫 (富山県立中央病院)
本山 浩・杉山 義昭 (脳神経外科)
大野 司・井上 雄吉 (同 神経内科)

Syringomyelic Cord Syndrome を呈した3例で空洞クモ膜下シャント (S-S Shunt) を経験したので, 術中 VTR を提示する。〔症例〕1例目は47才の女性, 33才で右手脱力と温度覚障害で発症し, 14年後両上肢